





後下細第一

以下ひきとひきおろしもの抄をあらわしこれ抄乃
 あらりしうすしう後どの物ごころを所のめ終る中
 色も筆れあやまり終る所をゆまうことあり
 年一うあうしるあくをまるにべしとあはじ
 くなむ本をんるにん色と兼もじりて
 ぶゆくりりあそふ乃神垣ちりあき堂の傍
 庭ちりちりて合て造営此次福をん終る抄
 れ感り下細と外記あ家双紙をんるに神
 乃あはるしつるあ懐中しそくをりて抄
 源氏乃物語のらん解あをび抄又とらあか



後下細第一

2

一系宗孫同家祇ちるものりてあそひ終つぬる
 より海釋ちるも終らるべし系當も通達院及
 あそびも終つぬるも終らるべし系當も通達院及
 人々をれあやまらぬ線あつてあらはれ
 天正十八年初冬小書寫の功をりぬ沙弥中醒

後深系圖

五十九年冬多摩皇子

醍醐天皇御宇

朱雀院

村上

冷泉院 六十三

花山院 六十五

圓融院 六十四

三條院 六十七

小一條院 無即位

一條院 六十六

後朱雀院 六十九

後一條院 六十八

後冷泉院 七十一

一條院長徳之以源氏物語終之寛弘長徳長保

寛弘初也

顯光兼任右大將時右大臣

堀河及比物語了乃建仁圓融院乃二の西子

後深系圖

三

系へ

師輔 右大臣九条兼

伊尹 謙徳云一條法政

兼通 大政大臣忠義云今上 狭衣のちね

境中納言

兼通 兼通 大政大臣忠義云今上 狭衣のちね

兵部式部

源氏物語 たきのけのたけのふた 兼通 大政大臣忠義云今上 狭衣のちね

大納言三位 狭衣

一、物部を源氏物語に記す事也。又、源氏物語の大將、冷泉院ちねに似たり。又、花山江、或ハ字、兼通、門下、王の臣と云なり。是の時、源氏物語の

兼通の源氏物語に記す事也。又、源氏物語の大將、冷泉院ちねに似たり。又、花山江、或ハ字、兼通、門下、王の臣と云なり。是の時、源氏物語の

史記

三

と云ふ心ちるべし
 一 中橋の菖も引交あそはしきさくらとされ菖
 花松うとのももあひひさ家那一古尋れこ
 とまじつり也
 一 おそつりこり引まれ池やみでの川せはくふ
 りん岸の山吹そともあひり源氏胡蝶巻の侍
 一 侍童 同あ
 一 源氏文 さま衣のりとも 堀川大長乃上ハ先帝れ
 侍もさうと也 妹文あてありまゝ一たりありあ
 の後大長れは終つりさま衣乃は母也。 中納言中お
 ハ源氏文乃文也

一 そひあそ也 二人の交女也
 一 菖文 後一葉也
 一 菖の志あひ 級字也。こころとらとより 級照
 や片思乃也
 一 花こそ花れと 菖乃尋あつへしけ初あそ
 定都引あひさうりまの書山吹乃花も花
 の中一うはつたれ
 一 うちあひあも引山吹の花交あやとれ
 こととあそふとらちちりあて
 一 ちりも中納言也
 一 ちりせん尋 大将乃所ん山吹つりともあひ

て独り也

一 河内をさすまに引合ふみよのをさすまに我を
まやちりふらの振ちやとある けしきり中三巻の
あまも志原人のちあまといふこと

一 りを乃をさすらなる中らるるさやまて
の地ちるへし

一 じはれ御一由引奇未勅らるる

一 けらるるのきり ありしとありはさんまよひ

一 ちさにあして二巻ふり姉妹兄弟のともくみ

一 てとよふこと南村史婦と妹共とさり

一 大及母あまもて新あけ ちさとと也

一 後たごめ 是より双紙地也これまであるべし

一 一 院乃はゆいおん けしきをやうの中まもれは

一 ちがふも本まも

一 一 院 太政大臣 後一条院御世

一 坊門 先帝御子或アの文乃はむしあ也

一 今上 けらの院乃一の文まも也坊門の上は

一 一 院 中あも 堀川屋の御宮れあも乃は

一 親あもてえはへるは腹りさ夜のむまれは

一 事とと出せり 男もさへくは後衣れり也

一 二位の中將 さ衣れ南宮也天通とあけ

又引くありていふはうらむのひらきよらあり
高野のたふさ 是の殿前

一志のふもせらむと ぬがねむらむとあり

一悪らむらぶ
一太政大臣の所むとあり 今昭憲天皇の
路を後一條院へまゝとせんといひ
洞院の上六捨川のおとせ此方

一去文の後一條院 内と申ハ一條院也
一中おのゑ物よりまらん出給ふみなり 高野の

よさげぬ賤乃むらむらむ也
一十帝の里 十帝は別よる
十帝は別よる

一高野ありて 高野ありて 高野ありて
ぬがね 高野ありて 高野ありて
高野ありて 高野ありて 高野ありて

一あひのみにとが くるまありて 大將の
とほりてありてありてありて

一あふさ成等 ありてありてありてありて

一あふさ 女房とてありてありてありてありて

一あふさのむらありてありてありてありて

一 形のりのあやめいばり 引ひき庭やうとてとられたる花はなありと
 ひ付ひくもせふり也
 一 志のりのあやめ 白あは浪なみを 志のりのあやめとてひくもせ
 白あは浪なみ末すえ動どう志のりのあやめとてひくもせ
 一 心こゝろとま 根ねある花はな末すえ動どう志のりのあやめとてひくもせ
 一 志のりのあやめ 源げん氏しあもはつ河があり、こころに源げん氏し
 はあも一いつ葉はたふたふとほよ大和おほ船ふね名なとま
 一 志のりのあやめとてひくもせ 形のりのあやめとてひくもせ
 一 驚おどろしゆくもせ
 一 うららきとてひくもせ

一 心こゝろとま 根ねある花はな末すえ動どう志のりのあやめとてひくもせ
 一 志のりのあやめ 源げん氏しあもはつ河があり、こころに源げん氏し
 はあも一いつ葉はたふたふとほよ大和おほ船ふね名なとま
 一 志のりのあやめとてひくもせ 形のりのあやめとてひくもせ
 一 驚おどろしゆくもせ
 一 うららきとてひくもせ
 一 志のりのあやめ 源げん氏しあもはつ河があり、こころに源げん氏し
 はあも一いつ葉はたふたふとほよ大和おほ船ふね名なとま
 一 志のりのあやめとてひくもせ 形のりのあやめとてひくもせ
 一 驚おどろしゆくもせ
 一 うららきとてひくもせ

一 夢の心は...
 一 夢の心は...
 一 夢の心は...
 一 夢の心は...
 一 夢の心は...
 一 夢の心は...
 一 夢の心は...
 一 夢の心は...
 一 夢の心は...
 一 夢の心は...

一 申...
 一 申...
 一 申...
 一 申...
 一 申...
 一 申...
 一 申...
 一 申...
 一 申...
 一 申...

新編

九

さちちるべし

大納言

高倉中納言 田巻一の大納言

又とんようをて中納言

左大臣の出入り

左大臣の出入り 中納言

源中将 左大臣

合奏として独り

勅定也

中務

少将 笙の節

弘徽盛とて少将の節とて

天雅の字あり

中務 笙の節 少将の節
大納言 田巻一の大納言
又とんようをて中納言
左大臣の出入り
左大臣の出入り 中納言
源中将 左大臣
合奏として独り
勅定也
中務
少将 笙の節
弘徽盛とて少将の節とて
天雅の字あり

うらとまじりまじりふ 中將の心めえちどおれ
ちいさなまじりまじりまじりの心とていふことありて
しつとありてありて

うらとまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

うらとまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

うらとまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

うらとまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

うらとまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

うらとまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

うらとまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

中將

心

せむし門又又母の成らぬ後が〜とまづのまづ〜さ
う〜此詞を信路のこ

一雲のあり 雲興 可尋

一あやうく 門乃信句をせむし〜のこ〜の
さ〜ん事と思ふ也

一三々々 汝院

一け宮せむし女一まゝし門母后もわがうま〜しは
也ああわらあふれ下し世乃男の代あ〜とまふれ
なへと思ふと源氏のまよん信路し〜のあひ
路りぞ弘徽皇后のまよんこれ世乃まよん〜のあひ
りり〜のまよん〜の信路母我乃〜のあひ〜のあひ

奏〜あふびは教り〜の七月めは母后くられ
あふび〜あふびにわたり〜の病り〜のまよん〜の
〜のあひ〜のあひ

一后もあのみや 女一まゝしはまよん〜のまよん〜
せられて天上のほ〜のあひ〜のあひ

一大臣あひ かり川あふり〜のまよん〜の退也を結る
あふらに伊勢のあひ〜のあひ〜のあひ

一あひ〜ん 天上のまよん〜のあひ〜のあひ〜のあひ
百はらの中を母あひ〜のあひ〜のあひ

一せむし〜

一

一

一ちく西川引舟未動 あり川反懸中への石と
くしくはは海なる歟

一石の海にゆく 壁の法にちちん

一中將 右長乃西連り 及上の輝をばはるるこ

一たぬしして 海に咽まらば 少思魚ありては

あへまほひく 何なるもしひを 一ゆく一あふ

の初し本邦乃介 翠帝ちとにせし 一紗をぬそ

一あふあれとては 一あふいとふらひりてふ

一あふもまらぬとてあふひりとて

一つふ又 只一男と也 つら

一ほくあんぢふはゆく あふ

一中將 一しとてあふははるるちちん

一みのあふも 大のそ衣は代り 女二文とまのしせん

一の海門乃は奇也

一あふやと 女二宮ははるる 一推をちちん 武彦也

乃ゆくり 海氏もあふとて 一あふひとぬるまらち

あふとて

一あふの 狹夜の奇しき 女乃の海氏もあふ

たとの心は海とて 天子みおはえん 乃の海氏もあふ

むさし 一のむさしの 乃の海氏もあふ 根をちちん

てはあふもあふ 小町 何とてはゆく

一あふのちちん あふ

狹夜抄一

の書

一 二多き みことのぬらり

一 ちくしん 川の萩乃所をまされを時鳥鳴しん
りぬるまの光

一 母多くのけあし 国 あはらうくさびれらるる
新日海氏の名 のりあり

一 泣てけう 泣膳 ぢちごりちるひ泣てく
ふも也 ひ泣りぬ

一 わが あまとあれと母ま とめ泣つる
一本懐の信 つと奇乃 まき たる く六 つた

一 ちり とま し 家司 は ま ちる べ
一 泣の れ は ち ら び よ し し し 思

と あ ま し ら う ち と ま は 保 氏 ま い は け つ と ま 夜
の 歌 あ や

一 う の い さ さ 女 二 文 八 ん ふ は く 保 氏 ま お い
ち は 何 も ち れ 泣 く あ の う き と す 建 く く
て あ 方 乃 代 と く 下 あ ち く と ち く て 保 氏
ま あ く を ぬ る

一 文 く り 奇 狭 衣 毛 う ち 衣 と 髣 す 志
り あ 方 の 代 と く 下 あ ち く て

一 移 ぬ り 引 夏 の 衣 と 移 ぬ り ぬ め と い は を い
く ハ 物 を や ち は さ り ん

一 山 さ ハ 志 の も 也 為 を 卷 り あり 南 時 ハ も

とものつし月也

一花よりうしろ引るをさうちの記の中へと強ちる部云
さうちをちをさうちやどハハハハハハ

一粟もすうりう さ夜奇也時多乃どもくちくねせ

一粟もすうりう

一粟もすうりう

一粟もすうりう 強厳甚微妙 注花亭云 精なる法
花を伝はりんとこの臨白甚おの光あてて本

八千の世界をとりしけく時りあ方此國土の
はれ月おのりトさうの法つる文也

一あまらりあつあつとさ極か 又兜率天のむくへ
うらちをさうりしともくまへしとくちくねせ

一あまらりあつあつとさ極か 又兜率天のむくへ
うらちをさうりしともくまへしとくちくねせ

一み腹の形

一多あしひる 極暑の比つる也 云々山よあり
古連教よ人ハ中しくさしちうりき 秋あく秋えい

一多あしひる 極暑の比つる也 云々山よあり
古連教よ人ハ中しくさしちうりき 秋あく秋えい

一多あしひる 極暑の比つる也 云々山よあり
古連教よ人ハ中しくさしちうりき 秋あく秋えい

一多あしひる 極暑の比つる也 云々山よあり
古連教よ人ハ中しくさしちうりき 秋あく秋えい

一多あしひる 極暑の比つる也 云々山よあり
古連教よ人ハ中しくさしちうりき 秋あく秋えい

一多あしひる 極暑の比つる也 云々山よあり
古連教よ人ハ中しくさしちうりき 秋あく秋えい

一多あしひる 極暑の比つる也 云々山よあり
古連教よ人ハ中しくさしちうりき 秋あく秋えい

一多あしひる 極暑の比つる也 云々山よあり
古連教よ人ハ中しくさしちうりき 秋あく秋えい

一多あしひる 極暑の比つる也 云々山よあり
古連教よ人ハ中しくさしちうりき 秋あく秋えい

一我もろり 獲衣奇く家八海の燈をむうらり
後までさしさ夜も年まで源氏の文よ志のび

あふゆくとせ

一 思きり引の川思きり流しり多のそ
とにハあそ下あひもたぬとせ

一 柳よもぬちより引奇事物

一 志も さきの山新久みりんと自^ら言てまは
せ也

一 うちよ美人く 一 ^片美乃ほあやあぬ事せ

^あがしめ事也

一 流とくは ぬのちがもさなれは^とと^もせ

^やも也

一 ありてうとせ 引奇事物

一 とも 舟門のさなを回^り車^ちして退^り出^るの場^ばみ^まる

一 源氏のまの事 さまよひま^りとぬと^り

一 ち^り也

一 ち^り也 ^當ま^り文^をと也 ^系番^お建^たぬ

一 何く人の 台大臣^に居^りむむめよ^き一 流せんも

一 流せんもよ^きなへ^ちも^り乃^は流^れ合^ひ也

一 流せんもよ^きなへ^ちも^り乃^は流^れ合^ひ也

一 流せんもよ^きなへ^ちも^り乃^は流^れ合^ひ也

一 指^さ中^{ちゆう}納^{なつ}也

太政大臣 一 一条院の女流

東院上

老たれ 今持中納言春宮大文兼宮

一 夫の如くこれ秘さうんじまの びは方源氏文
りふせとらんや也

一 みぶくしくゆる ち海深まとおもは玉海深今
形も自悔を

一 ちかごう 異ならやさそ前うとうの刀入に推
量もがたぬと云ふ也

一 涙くえまされ さそめをとおはらんとして
あうりし時乃ち出さうく也と云う女の
海也

一 一處院の 船の軒の山懐愁ちがうぬまのさへ
うくは船禁あられどくうくが体ぬすくおて
乃く人あうりどと人のよませしをされてや
しとむうぐり也おとこの今れく人云く

一 ひらうあうは 引船ぬまの船くうぐりしき
也

一 一のはちりま 第れ録り女三宮のさし
うちくあをし 女二のま乃あしゆああくうり
られくらんや也

一 ああむのうー さそめのとちゆくちあびあし
んとつひのぐれゆあうんじ

東院上

一

一 心うらやましく ちかむれを あらまらうりこそ
ちかむれの御也

一 心うらやましく ちかむれを あらまらうりこそ
をらてまほし

一 心うらやましく ちかむれを あらまらうりこそ
へん心残らうりまどと

一 心うらやましく ちかむれを あらまらうりこそ
されともや

一 母文 さ女のまうり給へて 異氣^{あつげ}や 母を給へ
るも母文の御也

一 母のまばうり 母上のわくまざれば給へ

一 夜やせらま女の御也 人むらし 夢同よまうり
ておまをくあくもあき^{あき}のうらやま

一 わらうり ちかむれ

一 ちかむれ ちかむれの御也

一 中務^{ちかむれ} 引 ちかむれ乃ち乃ちなるも 常陸^{しづはら}常陸^{あひ}此か

一 ちかむれとあき^{あき}のうらやま ちかむれとあき^{あき}のうらやま
の御也 ちかむれとあき^{あき}のうらやま

一 夜の ちかむれの御也 女二まへはのめり ちかむれとあき

一 ちかむれとあき^{あき}のうらやま 女二とあき^{あき}の御也
とあき^{あき}の御也 女二とあき^{あき}の御也

徒衣抄

二七

かゝるあゝん天子あてあされとやありめ
さんむさせ

一 言ぬ事月 田へまじり路へるはあてうあやめ
乃奇ふめるお珠島路へるをん並し修めや
あつ書家あまゝあつむしあつあつ物言のあお乃
あつあつとや入納云屋のあつあつしと二巻
あつあつ物結る後乃るあつあつあつあつあつあつ

一 言ぬ事月 田へまじり路へるはあてうあやめ
乃奇ふめるお珠島路へるをん並し修めや
あつ書家あまゝあつむしあつあつ物言のあお乃
あつあつとや入納云屋のあつあつしと二巻
あつあつ物結る後乃るあつあつあつあつあつあつ

一 言ぬ事月 田へまじり路へるはあてうあやめ
乃奇ふめるお珠島路へるをん並し修めや
あつ書家あまゝあつむしあつあつ物言のあお乃
あつあつとや入納云屋のあつあつしと二巻
あつあつ物結る後乃るあつあつあつあつあつあつ

一 言ぬ事月 田へまじり路へるはあてうあやめ
乃奇ふめるお珠島路へるをん並し修めや
あつ書家あまゝあつむしあつあつ物言のあお乃
あつあつとや入納云屋のあつあつしと二巻
あつあつ物結る後乃るあつあつあつあつあつあつ

一 言ぬ事月 田へまじり路へるはあてうあやめ
乃奇ふめるお珠島路へるをん並し修めや
あつ書家あまゝあつむしあつあつ物言のあお乃
あつあつとや入納云屋のあつあつしと二巻
あつあつ物結る後乃るあつあつあつあつあつあつ

一 言ぬ事月 田へまじり路へるはあてうあやめ
乃奇ふめるお珠島路へるをん並し修めや
あつ書家あまゝあつむしあつあつ物言のあお乃
あつあつとや入納云屋のあつあつしと二巻
あつあつ物結る後乃るあつあつあつあつあつあつ

一 言ぬ事月

あつあつ

足る也

一中宮 堀川殿の御むすめを其の御母坊門
上り申すは殿もあやうしうす也

一坊の御母とて 洞院上中此よりとよあしお拍
を根中の御也 可致上りううお野乃りて拍

りとの御はますしれちりけり又同也わ
ありうあて又わらうちり人さ殿とてさうりうを
和宮の源氏おうつていふ也

一くさ殿く 其の御母とて残りておのうらうと
うらやまはり

一中將 其の源氏のよりあはぬ御はりて

おのうらうの御はりていふもいとあはひあり
一はりていふもいとあはひありていふもいとあはひあり
りていふもいとあはひありていふもいとあはひあり
月とてその御はりていふもいとあはひあり

一其の御母とていふもいとあはひあり

一入る御 其の御母とていふもいとあはひあり
御はりていふもいとあはひありていふもいとあはひあり

一みどり御 其の御母とていふもいとあはひあり
うらやまはり

一ちふら御 其の御母とていふもいとあはひあり
てあはひあり

史記抄

三十一

一これおらんせよ。おおもひうらむくは只おまのま
 かりとうらみさきみもあがり
 一源氏のま まさあゆはら申一あらんし
 一あらんし お物のま ころあらんし。ままあらんしけし
 うらりあててし給
 一人のまあまを。いまのあれどまうあふらん。我
 ちあらんしあまのい人のまあまを
 一あらんし 申さるの物ころあらんし。あらんし
 まあらんしあまのい人のまあまを
 一あらんしあまのい人のまあまを
 一あらんし

一いさかひあまのい人のまあまを
 まあらんしあまのい人のまあまを
 一あらんしあまのい人のまあまを
 一あらんし 狭衣のま せうられあま
 一あらんしあまのい人のまあまを
 あらんしあまのい人のまあまを
 一せんしあまのい人のまあまを
 とそは退のま せ
 一三条のま 仁和寺のま 慶候のま 所のま 三のまあまのい人のまあまを
 一のまあまのい人のまあまを
 一のまあまのい人のまあまを
 一のまあまのい人のまあまを

一三条のま

一のま

一 駕うら 波洲に急須と申せしもの車也
一 けんち 供の童僧具と持てりべし

一 かくく 海氏物終りあづまらんちの物云々

一 ちりせしとめて ちりせしとめて車乳云々

一 母上も 形有升君成云々のある車云々

一 けしり けしりして威候所云々

一 半飼とて 見るに此のものをみせてん付り
とありの車云々

一 駕うら 波洲に急須と申せしもの車也

一 けんち 供の童僧具と持てりべし

一 かくく 海氏物終りあづまらんちの物云々

一 ちりせしとめて ちりせしとめて車乳云々

一 母上も 形有升君成云々のある車云々

一 けしり けしりして威候所云々

一あまのまはれしんていあまのほ河也さるのさうとあ
 らぬさうあふん倦いとしんていさるさよあふん
 んとほ所あふれしんていはれてゆんていあふん
 へあふんていあふんていあふんていあふんていあふん
 ふいんていあふんていあふんていあふんていあふん
 してあふんていあふんていあふんていあふんていあふん
 つしんていあふん

一あすな井い 龍音井はよあふんていあふん
 一あすな井い 龍音井はよあふんていあふん
 やとりあふんていあふんていあふんていあふん
 たりあふんい

一あふんていあふんていあふんていあふん
 一あふんていあふんていあふんていあふん

一あふんていあふんていあふんていあふん
 一あふんていあふんていあふんていあふん
 一あふんていあふんていあふんていあふん
 一あふんていあふんていあふんていあふん

一あふんていあふんていあふんていあふん
 一あふんていあふんていあふんていあふん
 一あふんていあふんていあふんていあふん
 一あふんていあふんていあふんていあふん

一 八とせゆけくこちぬハ眼をに注ぐまらやま
 一 物おろし 能多升 為のらに注師より見しと
 一 ても注をへ注るとに注をまづくくおろ
 一 ちるべし
 一 大補の志 むくの車はそくからんちるべし
 一 物おろしに さ衣乃河也
 一 うちをくをさされ うちをくくとさるべし
 一 ありしう さ衣乃注の中也 ちるべし 或は世と也
 一 つとや 注師よもあれつくとありしめす
 一 ありはら ちるしり 増ひおし注くると也
 一 とゆきとも 能多升 志をそしたのさるべし

一 とありなればとゆれとハの注ひあまうとある注
 一 此答也 能多升乃 註物をとらてみ^注くともよ
 一 しとやきんあめくのとありしを 早ト^いちるべ
 一 くるとせめれやどりあ也
 一 その水^をを 陰^のの念^{あり}
 一 あとらぬ^り 能多升^をしるげんてとせやど^る
 一 注^は注^がくれハ注師^のあられ^をあてともあせんと也
 一 車^のありあど 人^のりんせとせれあへとの注也
 一 きて車^{より}あつる注^くと也
 一 注車 二条^{あり}とせうくゆつた也
 一 家^の人^く あやうがら注^は注車^まつりく

ちるべし

一 ありていなく 法師ふんさくくもれどは狭衣
岩^{いざな}とあはれ

一 ありていなく 源氏もあちもあつべし

一 ありていなく 例^例の系^{けい}番^{ばん}と今^{いま}きり 師^し中^{ちゆう}納^{なつ}

一 ありていなく 然^{しか}の^の娘^{むすめ}今^{いま}娘^{むすめ}とつわさる也

一 ありていなく 今^{いま}の^のう^うか^かめ^めく^くう^うう^う法^{ほふ}あ^ある^る

一 ありていなく 仁和寺^{にんわじ}法師^{ほふし}はあづきりうに法師^{ほふし}か
かけちまふ付^つて

一 車^{くるま}ちとと 威^い儀^ぎ師^しう^うり^りけ^けら^らあ^あり^りと^と也^や今^{いま}ね^ねん^ん
とあ^あら^らま^ま也^や

一 ありていなく ひめのとれめとに^にあ^あり^りて^て二^にあ^あり^りて^て也^や

一 ありていなく 狭^せ衣^いと^と娘^{むすめ}あ^あら^らん^ん娘^{むすめ}あ^あら^らん^んふ^ふあ^あ

一 ありていなく 娘^{むすめ}あ^あら^らん^んに^に狭^せ衣^いを^をあ^あひ^ひけ^けり^りと^と

一 ありていなく 威^い儀^ぎ師^しい^いま^まも^も也^やめ^めの^のと^と人^{ひと}や^やり^りを^をれ^れと^と返^{かへ}

一 ありていなく ありていなく ありていなく ありていなく

一 ありていなく ありていなく ありていなく ありていなく

一 ありていなく ありていなく ありていなく ありていなく

一 ありていなく ありていなく ありていなく ありていなく

一 ありていなく ありていなく ありていなく ありていなく

一 ありていなく ありていなく ありていなく ありていなく

檢非違使の辨辨勳勳少將と後衣の名次傳給
 ひくろ也也内内大御所御所辨辨勳勳とてを代徳有代也
 判當及子とあちびるう門門役役りてあま
 させんといふ也也いづかたにまれくまの女を
 とまわちて傳傳く也
 一年あひくく乳母の視視を我我も年年老老ぬあひま
 さそふ人人もやつまてゆんゆんひひ志志法法惟惟ああんん西西行
 らんらん也也
 一一ちち流流くく姫姫若若ハハぶぶくくちちららととせせめめののととれれりり
 一一由由ととりりああるる人人也也 奥奥列列のの將將軍軍れれめめふふめめててららぶぶ

一一ああるるはは 毛毛よりよりささののははらら也也姫姫若若りりととるる人人
 毛毛見見ああれれ流流りり流流けけるるののああででここととハハおおががめめ
 ささひひせせんんすすううううららぬぬひひささちちくく物物ららるるととまま
 ままでで思思召召もも宿宿熱熱とと也也
 一一ままくくららくく 勝勝多多斗斗一一若若小小海海ららくく物物ああくくちち
 一一由由ととりりああるる人人 吉吉祥祥天天女女 源源氏氏和和定定よよ吉吉祥祥
 天天女女をを中中へへりりせせりりととああううくく法法氣氣付付ららすすとと
 ててめめめめととままののままちちににややららりりああららるる人人

一 ころもあざに 髪へりさぐさの若狭海へとも
 つら又鼻へもくもくもつらと也少おあま西ひ路
 へどもおがけうあまとも云神を何とて世に
 一 ぬりんと泣ちるべし

一 志ぞのほどもあに 髪若の洞也我力法う
 るひてうら下路へとも也

一 けくはつぞうちあふぐさひこそ 又かおあまの源
 き線片をそと路へあまとも又あまも
 今う鼻へて下へもあるまうあまの也い
 もことりりとも

一 ぬりくう 髪若のらちり

一 くれとぞに さあのはあくしゆ人海へちちり
 てみ^{世奥}のくへりさぐさあまのあまもあまも
 衣もあまもあまもあまもあまもあまも
 海へあまのせれともあまもあまもあまも
 路へあまもあまもあまもあまもあまも
 海へあまもあまもあまもあまもあまも
 夕うあまのあまもあまも

一 源氏あまもあまも 在又中將乃古繪山
 てほのあまもあまもあまもあまもあまも
 まつあまもあまもあまもあまもあまも
 らんとさうあまも

一人めしそ 源氏女を又中納乃時乃やうあう
まうりそと取少もさうしとあがりしやせ
一宮家の水れ 引奇東御流りくとまうまのまき
人らちた也

一太夫 さ家の母をと基うしとせはつる時
一きんをり 源氏 ありとあると 源氏抄弄花
うあり信よりしんのん

一あねと一ね 女のゆきとちハ 引奇 杖の杖なね
と一後りあをりしとを流りて名やああん
あきうてハふれしとハくくしとああん
がー 移るやあけ時のあくとハ能高井と

源氏女とあはらうとをりつる也

一さて海をうりうり ありつるこのねえを勝
ま又つるあどとひねんを慕れあらんハちて
母う人乃さ家と刀付流しとハ一切の事ハ
さ家の源氏宮ハは也香あり 母う人ととく
中へ流りて内よりさ家とく度く尋ねる
家との御也
一たう流れ 御流の内侍ニまの人とニまへは又もど
海のうせ流りあさしとくしとむめりあう
母まハさ家のまもとあがりし
一そのゆりう人ニまのまの御とあはらうと

て度のと八幡川殿乃重のあつたハニ多入乃重
下りぬ勢ありと也

一 東條 大政 大佐 東條の北条川らひとゆつた

とひ終へた今始末は事あるやうな事なれど
むづか終へる用や也其の由將といふや中

との終へり

一 元帝 式部心官

源氏文

後式部心官

宰相中納

男子 式部心官の由子あり

と根元の一腹文は中納御あり
母八重中納御の子と記す
系圖此母八重中納御の子

根元 若重の后
と名の内位は時一まうとあり
堀川殿の由子あり
中まとうとあり

けいづ 系圖を式部の官乃中將とわれは堀川殿の由子
ありあつんとさ名の内御也

一 志の之さ 由みあるとあるまじきとある或は
つらくししく思ふ也世中とありありとあり

ハ事なり事あり也
うむり 志の之さ人ありありとあり
ありありとあり

文抄一

三十一

てあまのこころをほつる也

一 さ衣心をわづらわたり

一 蝉鳴 黄葉漢宮秋 朗詠歌 蝉 許渾作也

一 漢武帝崩して荒れぬ蟻 ハ若れどく啼と

一 さだかりうら ハ 夢みるうらんと ありささび

一 もも色 ありし 地也

一 目のそらり 引り 草花のひとそく 秋の乃

一 おのひもえきん人なるあう

一 我とにめと 移り こそ 夢あめと せうく

一 ありしめは也 こそ 夢くう 寄 此 看尾 ちん

一 かの時とちん 夢多村の小家とあり 夢く

づるいふこころぬあがちちん

一 ありて 夢くあまの井の宿也

一 こころまゝく 引寄 未也

一 ひもの 涙氏とあり ひとく べん 思やうあ

一 はちとん 涙氏とのや 夢き 井 夢世のちん

一 とやちん とあり けい 也

一 涙のり 涙 ちん ちん ちん と ちん ちん ちん

一 かゝりく あまの 夢に あり ちん 奥列へ ちん

一 はちちん ちん ちん

一 ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん

夢多村

夢多村

うらなひをてんてんてんてんてんてんてん

一きんか 引あつてん思りん中へまゝあれたあつて
幾ぶふ後の志まじりかんり 古今

一あつてん 引あつてんあつてんあつてんあつてんあつてん
うらなひもあつてんあつてん

一あれはちんてん ちんてんあつてんちんてんちんてんちんてん
りびとせ

一うらのとせ 引あつてんあつてん
一たぐひも うみまじりふんおろし陸奥の國へ下

一うらなひもあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん
一年あつてんあつてんあつてんあつてんあつてん

中へあつてんあつてん

一うらなひもあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん
うらなひもあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん

一あつてんあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん
あつてんあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん

一あつてんあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん
あつてんあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん

一あつてんあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん
あつてんあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん

一あつてんあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん
あつてんあつてんあつてんあつてんあつてんあつてん

一九月を以てその 賄正除目^{ほくせいずりめ}は未^{いま}迄^{これ}有^ありし事^{こと}書^か
き候^{まう}とてし未^{いま}代^{しろ}改^か後^ごなり源氏^{げんじ}御^ごらり候^{まう}に
らうていひしなり中^{ちゆう}納^{なつ}云^い森^{しん}實^{じつ}也^{なり}内^{うち}又^{また}書^かは
ん^{へん}た^た後^ごへん^{へん}と^と終^{しま}る^る事^{こと}に^にも^もも^もあ^ある^るは^はゆ^ゆ
か^かが^がし^しめ^めす^す也^{なり}
一 切^きり^りあ^あり^り後^ごへ^へり^りは^は今^{いま}非^ひ書^かは^は西^{さい}封^{ふう}へ^へり^りも^も
一 切^きり^りあ^あり^り中^{ちゆう}文^{ぶん}也^{なり}と^と非^ひ書^かは^は書^かは^は書^かは^は書^か
連^{れん}と^とあ^ある^る事^{こと}に^にも^もあ^ある^るは^はゆ^ゆ
し^しに^にあ^ある^る事^{こと}に^にも^もあ^ある^るは^はゆ^ゆ
ら^らに^にあ^ある^る事^{こと}に^にも^もあ^ある^るは^はゆ^ゆ
ら^らに^にあ^ある^る事^{こと}に^にも^もあ^ある^るは^はゆ^ゆ

一 やうく のどほり ちづまる也
一 うらむじて さあきとんくある物らうーやけら
乃^の屋^や上人^{じやうじん}はさあきとんくある物らうーやけら
れ^れと^と今^{いま}あ^ある^る事^{こと}に^にも^もあ^ある^るは^はゆ^ゆ
一 げんすれ さあきとんく也
一 げんすれ さあきとんく也
一 げんすれ さあきとんく也
一 げんすれ さあきとんく也
一 物^{もの}ら^らに^にあ^ある^る事^{こと}に^にも^もあ^ある^るは^はゆ^ゆ
ら^らに^にあ^ある^る事^{こと}に^にも^もあ^ある^るは^はゆ^ゆ

漢字

七十五

あはれ

一 ぼやく 倭よこしりくおまはは喉がらうへん

一 ちのみまはれ あんぞ 不細おぢ

一 ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ おぢのうれうの海の橋はくちるやわ

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

第誤疾

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 ちのりふ ちとくえん 混入と云ふ縁入と云ふちるべし

一 誤抄

一 三十一

いふととて母を交ぬ兄中ちがうとくしとれども
人へのめんあるをともあり

一 ちがうともて母を交ぬとある旨判とせのど

うくも人に申せらるるひちて唯乾也きんせいの

一 然りとも母代と也

一 うくもちがう奇人へのめんあるともうくもちがう

一 一 候あるを也

一 又あるを二 志くせむやうもせしめの中りある

一 うくもく川の海よみん候海氏地結あもとなり

一 物ちちどありを文神うあがひるありしあう

一 一 候あるを也

一 一 候あり母代乃奇にふめるとの候へども母代うちこ
りしうくもちがうら候るる候と候はあはれなる人
へもあひむもあがも也

一 大りとも

一 一 候は中あごん事あふり候もあまなりくも

一 一 候もあまなりくも

一 一 候みまのまへりうくもあれいへんあまじうあう

一 一 候もあまなりくも

一 一 候あまなりくもあまなりくもあまなりくも

一 一 候あまなりくもあまなりくもあまなりくも

一 一 候あまなりくも

一うきあめ 今ひめを死せしむるの事
 一むねをさるるもあやうくこの世にうきあめは死せ
 一死んぞと
 一あやうく 興りあはれしきさきにえさむむきあめ
 てさあしをかあしせむらうとておの女房にうき
 かうきあめと
 一今の世にも 今ねよ一服式了のまのほりよとて
 一少將こゝろにゆくあやうきとてうきあめと
 と也 同様しつゝ中將よりいふ人し
 一又の日展乃ほあめく 今ねよのりやう
 一あやう

一うきくのあやうなるはこゝろに死せしむるの事
 一もづゝくあやうめする人し
 一本丁此 あやうなるを念ぶ 死すはとてな
 一は氣をさあめくは死すてうきあめとて
 一どあやうもむねとてあやうとて此あやうと
 一とりあめとあやうなるあやうとてあやう
 一あやうと 死ぬるのうかとて死んじあ
 一うきあやう此は死ぬるあやうとて又さ
 一あやうと
 一あやう おもひの河たうく
 一あやう 死ぬるのうかとて死んじあ
 一あやう

若とて備へらるるもむづかしくあはるる人志事だ
 う若のら也みるあうん先れとのみるわし。若
 色独信ううう。治めうううめ。あやめのと千
 人うらとあとのあはりううらとや也男れあえ
 せぬほととちれどもまは乳母ちとてやうあ
 用又あうはとつや也

一 つふあひい 乳母水門 鑰うちあひうらるるも
 てさ衣とつとひうり也 治まうううはさ衣の依
 衣つとゆとあちちて入あまうり。まおくあり
 きりやとさ衣やうう先のと又威候仰り
 らあんととさうらとあちちめして女のさやうは

一 うあひひむとがううもくあまうり
 一 つやうつあちちくゆしとれと女志のありと
 乃。さやあくむとてまう。さあとてうあ
 ちくもあうね也

一人志事な 保氏宮乃ううし

一 つあひのあううと衣とあていつやうり又うし
 てとらうとあもあるべしとあひあるべし
 一 女志事也 さ衣乃水詞也めのさあくむとあるべ
 一 一也也

一 ともあひ 引 若信ぬ縁がうりあうんうあた
 一 つうくあるうんととあひのたさ。つとあへ

まづうりまのあれもまのぶあおびのうまうあ
りくもとりりや

一 我をゆるりあて ときれのほつこあまぐらみもあ
られとあがり先されまてな浅もくく
路ぬまじやしあまも契さうくぬるる
を程あまきとこのまらうらのちまきと恨
び刺苗のやねとあまき路くまきとま
とくもろあ

一 山さふ水 俺ぬまはあ浅うまき若の福浅
てささふああうまむらんとそあふ又さ
ああまううと物あられうあひく

一 せいす人まき人あまあう せつあめていあ
うとそあひ ちあまうくくさやむいあ
まて又あてたまはありまあまらひひく
色あやまうくんとまうまあ

一 みるこのうみせま 懐妊ちるべし ちあへ下のあひ
とみるうりあうり ちあへ下のあひ
あうくまんと乳母や

一 ちあへ下のあひ ちあへ下のあひ
あうくまんと乳母や
あまあひのあひ
あまあひのあひ

さんとはあひひるがうあてにましてひひ
 まあまやうもあてて下れ日とくま
 路へり 古今世のうま目及ぬあは
 ちか人こそあててちりけれ 何れとあて

一 け度乃

大育の乳母 式部大補を成

通事子 大育の乳母

常陸守の乳母

一 めもあてて

独位也

一 け度乃 養育の乳母

一 け度乃 養育の乳母

一 け度乃 養育の乳母

一 け度乃 養育の乳母

一 け度乃 養育の乳母

一 け度乃 養育の乳母

一 け度乃 養育の乳母

一 け度乃 養育の乳母

一 け度乃

一 け度乃 養育の乳母

尋ねてもみよ。又世縁をいつりみらん。夢遊志づ
 と流るる身水とさうらひさふとともありしん
 のまじりしじ也 瑞夢
 一 後の 物忌乃るりあやせらるしに世縁をさるし
 物忌乃りかゝるあやると物色をいれど又いづもせ
 めは物忌鬼のりぬし原氏とてし
 一 海ぞ 洪懐姫とあがりめりあやせらるし
 一 あまの川奇しんこれあり 一 さ衣のま也
 一 此又い海りたれむく連らるる奇しむらりし
 一 わくしちん 飛鳥針毛奇し 一 名あまのまのあ
 一 さのわくしちんくわくしん也

一 ういふは ち成かけらるるの車乃車しとあがふ
 と云細いむと也これをして隠れとあがり
 一 女もむくハ針 掘下成忌欲虚言を乳母
 一 つあや威修師りしん海りるるさあのをちとら
 一 うくのそ 世中よりあがりる身時ハ山林の柄
 一 来とやうきば文ばく人ちと也男成り
 一 中も也
 一 海しんく 陳家 一 駿河守がめ君情あはれ
 一 みる虚言也
 一 してあめ 針あはかお殿とさ衣の名あふみ
 一 君け乳母と古知事といふ也 あんでしん事り

東海道

御時

一久しう 大彫^と彫^り流^るよす^り一^きあ^るも^はは^らま^り
 くる也^も乳^の母^は中^にや^るの^はも^ろく^じう^じや^也
 一どう^うあり^一 治^誕生^まま^でハ^らま^りて^はい^はる^はあ^り
 一^き女^の男^ちぢ^くも^しう^く乃^ん女^もく^んと^あり^も
 也^あり^ぬぶ^ぶう^う去^用ハ^忌よ^くも^あり^しか^お後^は
 治^産れ^るす^ちぢ^ぢあ^つく^いあ^のべ^らも^ちぢ^ぢと^し
 一^おも^とへ^だし^あり^女の^苦と^ハも^ろく^トう^めと^し
 又^又中^中あり^り 吐^吐云^云若^若し^具 如^如荷^荷
 一^うや^う乃^乃あ^るも^らハ^あや^ちも^の一^治見^見あり^り
 一^そう^あれ^れた^をま^まて^らら^くと^し
 一^急こ^そ 未^未勤^勤

一^りく^あり^り 乃^乃ぢ^ぢく^くも^しう^く乃^ん女^もく^んと^あり^も
 一^おも^とへ^だし^あり^女の^苦と^ハも^ろく^トう^めと^し
 又^又中^中あり^り 吐^吐云^云若^若し^具 如^如荷^荷
 一^うや^う乃^乃あ^るも^らハ^あや^ちも^の一^治見^見あり^り
 一^そう^あれ^れた^をま^まて^らら^くと^し
 一^急こ^そ 未^未勤^勤

一^急こ^そ

一^急こ^そ

うにせむぐさせぬんこ

一まゝこゝろ あゝねが女よあゝせぬぬこ

一おとこを めのを せうして中

一女君 あゝ せうと乳母あゝと内身荒涼

中此 あゝ 縁糸あす糸とまはせ糸乃女君

とあゝぬこ

一おとこを せう せうとていひ

一おとこを せう せうとていひ

一おとこを せう せうとていひ

一おとこを せう せうとていひ

一おとこを せう せうとていひ

刀子るや

一女の あゝ せうとていひ

一おとこを せう せうとていひ

一おとこを せう せうとていひ

一おとこを せう せうとていひ

一おとこを せう せうとていひ

一おとこを せう せうとていひ

一おとこを せう せうとていひ

一おとこを せう せうとていひ

一おとこを せう せうとていひ

越後

一

一我君もまた さ衣きさう 万奴あつてさ
一あはれき 善徳あつてさうあり
一あはれき ひうまぬん 深衣ありあり
一あはれき さあつて 破るるるに女はさ
一秋さ衣の括弧くわあひや
一あはれき 善草子あつてさ 引前わさせし
わはれき 毎人うちとあつてさ ぬい
わはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
わはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
わはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
わはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
わはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
わはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
わはれき さあつてさ 中ねくさつてさ

一あはれき 風より波乃立ぬよあつてさ
一あはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
一あはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
一あはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
一あはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
一あはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
一あはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
一あはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
一あはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
一あはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
一あはれき さあつてさ 中ねくさつてさ
一あはれき さあつてさ 中ねくさつてさ

遠安法師

のり

一ちりして所へおられぬ所ありあつて彼等
 礼乃を奴おと思つてゐるべし
 一妻をけりしつゝあきれたり自残りしあつんぞ
 一男も志りし郎んちりしおあり先さんも理也
 一あまりしけりて所へあやうくはれぬしめら
 一もあまりしけりてゆりやも
 一おのい候て 身のたごれおありいおぬまの思
 一つもとゆいありぬ心のいとぬきられはれぬしめら
 一しゆへ人のちりぬ山へくらうしと也
 一りふ法入りあふまきぬれも懐妊のうるる食友
 一いふつてやも也

一急なりハ さいのゆめしあまりさいにゆえり
 一あまり也
 一はり乃 おおしゆ人の買得と也 小氣を
 一換と云是也
 一それや 小氣後の日事ハ志しきんり也
 一とちりしれ 隣おあもいふ知りしとさいへ下し
 一ゆちめめのとが 他方ともうしひ也とゆい
 一ゆりゆえらるるくも月もゆりしんぞ
 一舞い今までさい改し改し也
 一あまハ例せ あまり乃也と改し上りあり

一 下草 源氏文のト草也

一 志はあへの草一 くれあの一と云也

一 一の草 懐妊の草也 延生ありていつやうも

下あそあひせしと云りあす也。あれが

をわらひよと云ふのみとちるべし

一 うれんのうげと さいふりある人云也

一 あみりり さいふりあふかあはあすれと

志あそと云ふもあすれ延生あすれをいひ

くくうらん一 東^{めま}ちと云うあすれはあす

あすれいひせしと云りあす也

一 一の草と云ふもあすれと云ふもあすれ

此の草一、ももに母と云ふもそのまゝと
 腋の字は含りり。母と云ふは延生とあすれと
 一 しの草と云ふ 草もあすれ人の心と云ふ人し
 一の草と云ふ 草もあすれ人し
 一 夕草也 草のありら定らる延生と云ふ也
 一 一の草は 秋の草也
 一 一の草と云ふ さいふりあすれと云ふもあすれ
 と云ふもあすれと云ふもあすれと云ふもあすれ
 一 夕草也 しの草はれ河うらあすれし
 一 一の草 草もあすれと云ふもあすれ
 一 又は一源風草もあすれ 朗詠 のとれをれと云ふ

一 一の草 草もあすれと云ふもあすれ
 一 又は一源風草もあすれ 朗詠 のとれをれと云ふ

秋まゝんと女君乃常懸れは味なり秋也乃而
んとよめ家守りもうし也。志づもなるとんも
此詞也

一の舟 唐泊 くらを南り也今の故名あり人をも
らすもよもははるもよも 御出さるる今も平

一は太夫 道成しお海りの園を衣のあて
たるとし

一太夫のあり くら女乃あるに太夫のあて
よひもるもよも 太夫乃あてと女君の懸りと

あつよ乳母をよのんどもさうり 太夫の女君よ
ら秋うらると後さ也

一とさ飯うらぬなり 女君乃法のつらうと
あつとらやうのあつとく 懐妊中ハ物ありし
と秋のあて思ちるひもるべし 此は余下あつと
あつと人なり又あひ秋うらぬ也

一とさある 先のとた方ありてとさうりてく
うらあ秋のあて思ちるひもるべし 此は余下あつと
あつと人なり又あひ秋うらぬ也

一うらむのうりて 乳母後立して立けるも
あつとあて思ちるひもるべし 此は余下あつと

あつとあて思ちるひもるべし 此は余下あつと

形を升と云ふ

髪うしろ。肩より越折るる人し

ありしあひま。さ衣の丈下り此鏡より下

あひま也

破綻あひま也

背縫也

ちやまの。さ衣へ肩乃借由と云ふ

てくはれ也

源氏もあひまをいふもあひまの物と云ふ也

狭衣下紐第一流

